

# 地域コミュニティにおける子育て支援パラダイムの構築

## - 岸和田市・チャイルドスペースカフェわかくさの実践をめぐる実証的考察 -

学校教育研究科学校教育学専攻  
幼年教育コース  
M07025G  
梅野 和人

現在、我が国では少子高齢化が進み、その対策として保育制度や働き方の見直しを含め、子どもを育てる家族への支援の重要性が広く認識されている。行政施策は1989（平成元）年度から、本格的に少子化対策に乗り出し、現在まで子育て家庭をサポートするためのさまざまな支援事業を示して具体化を図ってきた。現代の地域社会に暮らす子育て家庭が直面する問題に対して、筆者は居場所の提供とコミュニティサポートを目的に、2007（平成19）年9月から大阪府岸和田市の自宅を改築し、名称を「チャイルドスペースカフェわかくさ」として子育て中の家族支援を始めた。形態は地域のボランティア活動に近く、子育て支援のネットワークを活用しながら、「地域主体」を意識した取り組みとして実践を展開している。本論文では子どもを育てている家族への支援に対して、行政主導の事業ではなく地域を主体としたボランティアな立場で実践を行い、その有効性について考察した。地域が主体となって行う家族への支援は次の4つの項目を目的にした。

- ① 子どもの育ちの支援
- ② 親の育ちの支援
- ③ 親子関係の育ちの支援
- ④ 地域を主体とした子育て環境を構築するための支援

### 1) 子どもの育ちの支援

家庭養育期にある親子の利用を主目的とするため、主に0歳児から2歳児までのいわゆる乳児期から幼児初期の子どもを持つ親子を対象としている。

### 2) 親の育ちの支援

親の育ちの支援を目的のひとつとし、親として子どもと向き合う前に女性としての視点に立つことによって、子育てに向き合う気持ちの幅を広げる事に繋がると考えた。

### 3) 子関係の育ちの支援

子育てに対する充実感や気持ちの安定を親に促すことを目的として、親子の関係を見直したりリフレッシュしたりする環境が必要となると考える。

### 4) 地域主体の子育て環境を作るための支援

地域主体による子育て支援とは子育てをする家庭に対して地域住民自らが支援の必要性を認識し、ニーズに応えるための支援を行うことであると考えられる。

2007年9月から開始し、広報や利用者同士の口コミ効果などにより、11月頃から利用者数が増加した。2008年6月より子育てサークルの場所利用の要請があり、日程調整によって施設使用を行う。サークル利用には障害児を持つ家族からの要請があり健常児と関わることは

別に、同じ障害を持つ子どもや家族との関わりを深めたり親同士の情報交換、さらに気持ちの安定という側面の保障を目的とする。

具体的支援の目的や方向性が利用者の意識ニーズに沿ったものであるかどうかを調査した。

#### 調査目的

- ・ 支援活動に対する利用目的の把握
- ・ 活動形態や方法の適正
- ・ 利用者における子育て支援利用状況の把握

#### 第1回量的調査における結論

- ・ 周知方法は子育て仲間、家族、近所の人などからの口コミ効果大きい。
- ・ 利用者は「親」と「子ども」の双方において利用価値が高いと認識している。
- ・ 利用頻度、利用日の傾向は分からなかった。

第1回調査項目を、さらに検証をすすめる。キーワードは「親」「子ども」「親子関係」「地域」。

#### 第2回量的調査における項目の結論

- ・ 親子が落ち着ける居場所として継続的に利用する傾向が高い。“日常的に利用する”という定義は妥当でない。
- ・ 利用者はコミュニケーションを広げ、普段と違う気持ちで子どもを接することを意識し言葉がけなどに影響している。
- ・ 利用者は立地条件のマイナス面を感じながらも地域住民が自宅で行っている子育て支援に安心感を持っている。
- ・ 利用者は子育てについて関心が高く、期待感を持って「わかくさ」にある玩具や絵本で遊んだり他児と関わったりする。
- ・ 利用者は地域の子育て支援サービスやイベントを積極的に活用する傾向がある反面、地域との繋がりを強く求めない。

#### 質的調査

##### 調査目的

- ・ わかくさの“安心感”のファクターを明らかにする。
- ・ 利用者が地域に対する認識と子育て支援の必要性を明らかにする。
- ・ 利用者が持つ子どもや子育てへの思いと支援の方向性を提示する。

##### 質的調査の結果と総合考察

利用者は気持ちの居場所を得て、子どもとの関わり方や考え方を物的人的環境と対話することで安心感を持つ。結果、地域コミュニティとのつながりを感じ、孤立感や閉塞状況を変化させていこうとする意欲につながっていくと考える。利用者である家族は親も子どもも、さまざまな形と方法で地域とつながる機会を持っている。以上の考察結果から「わかくさ」における物的環境および人的資源は「親」「子ども」「親子関係」と、さらに「地域とのつながり」においても価値があると結論付けた。

##### 課題

子どもが乳児期にある親子の利用に限定。今後、利用者への継続的な「わかくさ」利用による子育てニーズの変化や子どもへの関わり、家族の変化などについて継続調査する事で「わかくさ」の利用効果を明らかにする必要があると考えられる。また地域の子育て家族を対象として、「わかくさ」に対してどのような方向性が求められ、どのような可能性を広げていくべきか探っていきたい。

主任指導教員 横川和章 教授

指導教員 佐藤哲也 准教授